

保育におけるいのちの教育 — 学生による指導案作り —

中 根 淳 子
尾 上 明 子

I. はじめに

今、「いのちを大切にする」というごく当たりまえのことを国を挙げて声高に叫ばなければならない時代になった。愛知県では、平成18年度より、生命のかけがえのなさ、誕生の喜び、自信や夢を持って生きることの大切さなど、いのちを大切にすることを育むための活動を「命を大切にすることを育む教育推進事業」として、広く県内の幼稚園、保育所及び小中学校に呼びかけている（応募によりモデル園・校として選抜され、合わせて110園・校が実施）¹⁾。これは特に文部科学省が、長崎・神戸・新潟三条市など児童生徒が関与した事件を受け、児童の問題行動対策重点プログラムを掲げたことによるものである。しかし、このような国や県の動きをみるまでもなく、いのちの授業の実践は、すでに全国で行われており、また広まりつつある。これまでの取り組みは主に児童・青少年対象であったが、先に述べたように愛知県の推進事業が、平成18年度から乳幼児期より始められたことは注目に値するであろう。また、平成19年度より新たな取り組みとして、保育士・幼稚園教諭、小中学校教員など命を大切にすることを指導者のための研修・セミナーが開催される²⁾。

さて、過去3回のわれわれの研究『保育者養成における生と死を考える試み』は、将来保育者として立とうとする学生および、その対象となる幼児という二者の立場を見据えての実践であった^{3)~5)}。子どものいのちに向き合う者として、当然であるがゆえに見落とされてきた「いのちの尊厳」に気づき、そのために何ができるのかということを考える動機づけを目標として試行してきたものである。また、幼児期が死生観の発達確立期にあり、さらに揺れ動く時期であることは、これまでの研究において明らかにされており、それ

ゆえ、幼児期が死生観の発達において重要な時期であることはすでに確認してきた。レギーネ・シントラーは、幼児期の子どもが素朴に問いかける疑問に対して、私たちおとなが、どのような態度をもつかということは極めて大切な問題であると指摘している⁶⁾。また、死は、掛け算や歯磨きの方法のように説明したり、論じたり、教え込むことはできないが、だからといって私たちは問題を避けるわけにはいかないと述べている。本プログラムに参加したある学生は、実習中、「ぼくのおじいちゃん、もうすぐ死ぬんだよ」と楽しそうに話していた子どもに対して、「いのちの授業」で学んでいなければ、「死」という言葉に動揺し、どのように対処してよいか分からず無視するか受け流していたかもしれないが、子どもの死生観を学んでいたので、これを素直に受け入れ対応することができたと述べている。このような点を踏まえ、本研究は、説明したり論じたりすることができない幼児期にある子どもに対して何ができるかという試みである。具体的には、これまでのプログラムに新たな内容を加え、保育科学生に指導案を作成するという課題を与えた。全23回のプログラムを構成したが本研究の結果と考察は15回までのものである。学生たちの試行錯誤による指導案作りを通して、彼ら自身がこの問題に関する認識を深め、その難しさを感じつつ、子どもに人間といのちある全ての生き物・自然や環境への関心を持ち「いのちの大切さ」を育む保育を行っていくことができることを願いとしている。

II. 方法

2007年度のいのちの授業のプログラムは、表1の通りである。

保育におけるいのちの教育

表1 2007年度プログラム

1	4月23日	1. 自己紹介・名札とファイル（中表紙含む）渡し 2. 名札作成 3. 生と死を考える授業の目的・目標解説。諸注意。 4. 質問紙記述：テーマ「死のイメージ」 5. 第2回の課題説明
2	4月30日	1. 第1回記述に関する振り返り 2. 自分自身の誕生をめぐる物語を発表。写真・子どものころの洋服など持参 3. 発表感想記述 4. 講評
3	5月7日	1. 第2回の感想の講評 2. グループワーク「死のイメージ」
4	5月14日	1. 子どもの死生観① ダナ・カストロ『あなたは子どもに「死」を教えられますか？』を中心に解説（資料配布 ⁷⁾ ） 死に対する年齢別の理解度を3歳まで、3歳～5歳、5歳～10歳に分けて解説する 2. 子どもの死生観② 兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会による 「幼児・児童の死生観についての発達段階に関する意識調査」の解説 ⁸⁾ 。パワーポイント使用 3. 教員による絵本の読み聞かせ『かえるくんととりうた』『ずーっと ずっと だいすきだよ』
5	6月11日	1. VTR 視聴 「子ども 輝け命」小さな勇士たち 小児病棟ふれあい日記 2004年 2. 感想記述
6	6月18日	1. 教材としての絵本（パワーポイント・スライド資料配布） 幼児期が死生観を養う重要な時期であるとなえ、それを支援する手がかりとして絵本があることを紹介。子どもの発達・環境やエピソードに合わせて絵本を自然に取り入れることを説明。絵本をレギーネ・シントラーのいう「心の蓄え」となるように用いる必要性を説明 ⁹⁾ 。 2. 学生2名による『ママだいすき』『ミッフィーのおばあちゃん』の読み聞かせ 3. 絵本の紹介・展示①
7	6月25日	1. 学生2名による『いのちのまつり』『わすれられないおくりもの』の読み聞かせ 2. 絵本の紹介・展示② 3. 保育現場での取り組み例の紹介① ○幼稚園での事例紹介 4. DVD「岸辺のふたり」上映
8	7月2日	絵本作家 近藤薫美子氏講演 「いのちの循環」
9	7月9日	1. 保育現場での取り組み例の紹介② ○専攻科学生の取り組み パネルシアターと指人形 2. 課題説明①・グループ分け
10	7月16日	1. 課題説明② 2. 指導案記入方法の説明
11	7月23日	指導案・教材作りのグループワーク
12	7月30日	指導案・教材作りのグループワーク
	夏季休業中	各グループ個別指導
13	9月3日	課題提出
14	9月17日	授業全体を通しての振り返り記述

15	9月24日	発表①
16	9月30日	いのちをバトンタッチする会主催、同会代表鈴木中人民・生と死を考える会全国協議会会長、高木慶子氏の講演
17	10月1日	発表②
18	10月8日	発表③
19	11月12日	佐藤律子氏「出会う楽しさと乗り越える喜びについて」講演
20	11月17日	幼稚園での指導案の実践・3グループ
22	12月3日	大江真道氏「日本人の死主観」講義
23	2008年 1月7日	プログラム全体への振り返り記述

* プログラム中に使用した絵本・DVD・VTRの出典は巻末参照

1. 生と死の授業対象者：本学保育科2年生女子
21名

2. 研究方法：

今年度の「生と死の授業」の目的、目標は以下のように設定した。

目的 生と死を考えることを通して「いのち」の大切さを学ぶ

目標

- 1) いのちとはなにか、いのちのかけがえのなさについて考える
 - 2) 死について考えることを通していのちの重みを考える
 - 3) 保育者として、子どもたちに「いのち」の大切さを伝える役割があることを自覚する
- プログラム全体は表1に示した。今回は、緒言で述べたように、目標3を特に取り上げ、さらに下位目標として下記の3点を設定し、③は学生への課題とした。その課題を評価することによって「生と死の授業」のすでに終了したプログラム16回までを考察する方法をとった。

- ①子どもの死生観の発達について知る。
- ②子どもの死生観の発達を支える一つの方法として、絵本が教材となることを知る。
- ③子どもの死生観の発達を支える保育指導案を試作する。

3. 課題の進め方

2006年度プログラム第6回でも同様の試みを実施しているが、「保育園の園庭で子どもがおりを踏みつけている」という条件設定があった上、グループワークの所要時間が1時間ほどしかなく、

深まりが見られなかった。そのため今回は配布資料を通して「子どもの死生観の発達を支える指導案－『蓄え』につながる教材を作る」というねらいを明示し、プログラム9回から12回までを指導案作りに充てた。レギーネ・シントラーは、子どもの死生観の発達は、子どもが「心の蓄え」を作るために大人がどのような方法を用いたかということやどのような対話をしてきたかに依存していると述べている¹⁰⁾。我々はこの考え方にに基づき、保育者が子どもの死生観の健全な発達を支援する目的を次のようにとらえている。つまり、早く正確に死の意味を理解させたり、アニミズム的な思考を正したりするのではない。そして、死生観の健全な発達を支えるという意図をもって、子どもの発達に合わせ、普段の保育の中で安心感を与えながら展開することである。昆虫の死や飼っていた動物の死など身近な出来事をきっかけにし、発達を考慮しながら進めるものである。第9回の課題説明では、これらのねらいについて慎重に解説した。

また、これまでの筆者らの研究を通して、絵本が保育科学生にとって親しみの持てるものであると同時に、保育現場においては幼児に「絵」を通して「いのち」について豊かに語りかけ心の蓄えとなりうる教材であることがわかっている。そのため、保育指導案の中に絵本を何らかの形で取り入れることを条件とした。

プログラム第9回では特に上記の指導案のねらいと条件を説明したあと、本学専攻科学生が行っているほぼ同様の取組の発表を聞き、課題をイ

メージしやすくした。その後、2～3人のグループ編成を行った（1名は単独の取り組みを希望）。指導案は4～5歳児を対象としたあるひと月の取り組みとし、週に一日ずつ死生観の発達を支えるための教育を組み入れることとした。3歳児は語彙の中に「死」が出現してきているが、コミュニケーション能力の月齢差や個人差が大きいため対象としなかった（文献：）。指導案は月案、週案、日案を書かせた。月案、週案にはそれぞれのねらいと内容を記入させ、週案に関しては家族との連携方法についても記述させた。日案はねらいと内容、環境設定を含む具体的な展開方法、保育者の配慮、家庭との連携を記入させた。保育者の配慮は具体的かつ詳細に書くよう指導した。日案中の1日分は、主に午前中の主活動部分で実施可能なものとし、10月に実際に幼稚園で実践することとした。実践する幼稚園は昨年からの助成により「命を大切にすることを育む教育」を実践していた

園であり、今年度も同様の試みを継続している。今回の考察は本研究の締め切りの都合上、実践については割愛した。

夏季休業中はグループ別に個別指導を2～3回行った。これらの指導案に対する指導としては、子どもの「心の蓄え」となるものとし、知識を詰め込むものではないことを強調した。また、保育教材や絵本を有効に使うよう助言を行った。これらの助言は研究者の意見を強調するのではなく、教材の使い方のアドバイスや難解な用語や不適切な用語に関する助言、抽象的な部分をできるだけ具体的にするようなアドバイスを中心とした。

Ⅲ. 結果

1. 学生の作成した指導案

学生に与えた課題のテーマは表2の通りであった。また、今回考察のために取り上げた指導案の一例を表4～7に示した。

表2 課題のテーマ

	テ ィ マ	ね ら い	内 容
1	一つの命はみんなの命	自分のいのちが周りのいのちのおかげで存在していることを知る。	<ul style="list-style-type: none"> 動物園に行き、動物が動いていることを知る。 身体表現を通して自分や動物たちが動くことができ、生きていることを感じる。 聴診器を用いて、実際に心臓の音を聞き、生きていることを実感する。 仕掛け紙芝居を通していのちのつながりを学ぶ
2	つながってる	いのちのつながりに気づき、いのちは自分ひとりのものではないことを知る。	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りのできごと、自然事象に触れ、感動したり、変化があることに気づく。 絵本やエプロンシアターなどの教材を活用したり、園庭という身近な環境を通していのちに触れいのちのつながりを知る。
3	みんなのいのち	<ol style="list-style-type: none"> すべての生き物に尊いいのちがあることを知る。 一人ひとりが家族や周囲の人々から愛情を受けながら誕生し、育ってきたということを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵話や絵本を通して様々ないのちに興味、関心をもつ。 妊婦と触れ合う実体験を通して生命の誕生について知るなかで、いのちの大切さに気づく。
4	いろいろなお友達に会おう	自分は両親に愛されて生まれてきたことを知り、全ての生き物は違って、みんな大切ないのちであると気づく。	<ul style="list-style-type: none"> 絵本を通して、まわりの人と違っていてもその人は素敵な力を持っていて必要な存在であることに気づく。 保育者やお友だちと命について話してみる。
5	Only One	<ol style="list-style-type: none"> 身近な自然の変化に気づき、興味や関心を持つ。 身近な動植物にも自分と同じようにいのちがあることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 気温の変化に気づき、衣服の調節をする。 身近な自然にかかわって遊び、発見や喜びを伝え合ったり、疑問に思ったことを調べる。 植物の姿の変化に気づき、生命の不思議を感じる。

6	老いの中の成長	“老い”や“死”が人生の一部にあり、まわりに支えられて生きていることを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ●『ずーっと ずっと だいすきだよ』を見る ●落ち葉や木の実などを観察する ●「だいじょうぶだよ、ぞうさん」を見る
7	命の大切さ	1. いのちを大切にすること。 2. 友だち、動物などに対して優しい心を持つ。 3. 「いただきます」の意味を知り、食べ物を大切にすること。	<ul style="list-style-type: none"> ●素話を通して、いのちの温かさに気づく。 ●動動物園で動物と触れあい、実際にいのちの重みを感じる。 ●絵本を通して、死に対する悲しさ、生きている喜びを知る。 ●パネルシアターを通して、いのちに感謝し、自分も含めて友達や動物を大切にすることを持つ。
8	自然の循環	生から死、そして新たな生命が生まれるまでの命の循環があることを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ●「リベックじいさんのなしの木」の読み聞かせをしてもらい、植物が成長する過程に気付く。 ●秋の自然の中を散歩し、生きている植物や虫たちの色や形、感触等を楽しむ。 ●自分たちが実際に見た自然の様子を絵に描くことにより、自然をより身近に感じる。 ●パネルシアター『葉っぱのフレディ』を見て、命は循環する、ということに驚く。
9	家族の絆 ～つながり～	1. いのちのつながりについて考える。 2. 自分ひとりで生きているのではないということを身近な人を通して知る。 3. 家族に対して感謝の気持ちを持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ●「いのちのまつり」の朗読を聴いたり、人形劇を見ることにより、いのちのつながりについて関心を持つ。 ●保育者の家族の話聞き、自分の家族の存在を意識する。 ●自分の家族について考え、感謝をみんなに伝える。

表 3 指導案の一例 テーマ「みんなのいのち」

月 案		
ねらい	<ul style="list-style-type: none">・ 全ての生き物に尊いいのちがあることを知る。・ 一人ひとりが家族や周囲の人々から愛情を受けながら誕生し、育ってきたということを知る。	
内 容	<ul style="list-style-type: none">・ 絵話や絵本を通して様々ないのちに興味・関心をもつ。・ 妊婦と触れ合う実体験を通して生命の誕生について知るなかで、いのちの大切さに気づく。	
週 案		
	ねらいと内容	家庭との連携
第 1 週	<p>ねらい：季節の変化を感じながら動物や植物の命に興味・関心をもつ。</p> <p>内 容：命についての絵話を見て、問いかけ等に参加しながら動物や植物にも命があることを知る。</p> <ul style="list-style-type: none">○ 絵話を通じて・ いのちの存在に気づく。・ 動植物のいのちの誕生について知る。・ 動植物の成長について知る。・ 季節ごとの動植物の様子を知る。・ いのちの循環について知る。○ 自分たちの誕生や成長について保護者に聞くように促す。	<ul style="list-style-type: none">○ 子どもが赤ちゃんだった時のことや、生れてくるまでのことなどたくさん話してあげる機会をつくっていただく。
第 2 週	<p>ねらい：人間の生命の誕生に興味・関心を持つ。</p> <p>内 容：絵本『いのちは見えるよ』*を見て、生命の誕生やいのちとは何かということを知る。</p> <p style="text-align: right;">* 出典は巻末参照</p>	<ul style="list-style-type: none">○ 子どもが生れる前や生れた時のエピソード、子どもが赤ちゃんだった時の話しやそれぞれの時の気持ちを渡した紙に書いていただく。○ 子どもが赤ちゃんだった時の写真を用意していただく。

保育におけるいのちの教育

第 3 週	ねらい：自分の誕生について友達に知ってもらい喜ぶ。 友達の誕生に興味を持つ。 内 容：赤ちゃんの時の写真を見せながら、子ども自身に話をしてもらったり、保護者に書いていただいた誕生についてのアンケートの内容を子どもに伝える。	○子どもがお腹の中にいた時の様子について、子どもに話してあげる機会を作っていたく。
第 4 週	ねらい：人間の生命の誕生の過程に興味を持ち、命の大切さを知る。 内 容：実際に妊婦さんに来てもらい、話を聞いたりお腹に触れたりして命を感じる。 ○妊婦さんのお腹の中の赤ちゃんについて話を聞く。 ○妊婦さんに赤ちゃんが生れる前の気持ちを聞く。 ○子どもたちが知りたいことを積極的に妊婦さんに聞く。 ○妊婦さんのお腹に触れたり、聴診器で赤ちゃんの心臓と自分の心臓の音を聞き比べたりしていのちを感じる。 ○一人ひとりがかけがえのない存在だということを知り、命の大切さを実感する。	○みんながどれだけ家族や周りの人から愛されているかということを伝え、命の大切さを教えていただくようにする。

表 4 指導案－1 9月5日（水） 5歳児（30人）

ねらい ・季節の変化を感じながら動物や植物の命に興味・関心をもつ	
内 容 ・命についての絵ばなしを見て、問いかけ等に参加しながら、動物や植物にも命があることを知る	
具体的展開方法 (環境設定含む)	保育者の配慮
・導入 ・絵ばなしを始める	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが落ち着いて座って話を聞けるよう言葉をかける。 (中略) ・絵ばなしの題名を言って、始める。 「みんなは、いのちってどんなものにあると思う？」 ・子どもの反応を見る。 「そうだね。」 ☆次のページをめくる。 「この絵の中にもたくさんのいのちがあるんだけど、みんな分かるかな？」 ・子どもの反応を見る。 「そうだね。ここにいるリスさんもチューリップもちょうちよも鳥さんもみんな生きていて、命があるんだよ。ここに生えているお花が咲いていない小さな芽にも、いのちはちゃんとあるんだよ。」 「ここを見てごらん、この鳥さん何をしているのかな？」 ・子どもの反応を見る。 「この巣の下、ちょっとだけのぞいてみようか！」 ☆巣を、ペロッと一瞬めくる。 「見えた？」 ・子どもの反応を見る。 「じゃあ、もう一回のぞいてみようか！」 ☆今度は、ゆっくり巣をめくる。 「みんな何があったか分かった？」 ・子どもの反応を見る。 「そうだね、たまごがあったね。この親鳥さんは、一生懸命たまごを温めているんだね。このたまごって、この後どうなるのかな？みんな分かる？」 ・子どもの反応を見る。 (中略) 「そうだね、また葉っぱがいっぱい付き始めたね。」 「こんな風に、自然の中にはたくさんのいのちがあるんだよ。そして季節が変わるごとにそのいのちも成長していくんだよ。」 ・子どもの反応を見る。 「これで、絵ばなしをおしまいにします。」
・次の活動につなげる	

・来週の活動につなげる話をする。	<p>「今までは、動物とか植物の命の話しをたくさんしてきたけど、みんなにも命ってあるよね？」</p> <p>・子どもの反応を見る。</p> <p>「じゃあ、みんなの体はどうか？成長してる？」</p> <p>・子どもの反応を見る。</p> <p>「そうだよ、年少さんや年中さんの時よりも、体も大きくなったし、できることもいっぱい増えたよね？」</p> <p>・子どもの反応を見る。</p> <p>「じゃあ、みんな年少さんの時より、もっと小さかった頃のこと覚えてる？」</p> <p>・子どもの反応を見る。</p> <p>「みんなはね、小さな小さな赤ちゃんだったんだよ。赤ちゃんの時のこと覚えてるかなあ？」</p> <p>・子どもの反応を見る。</p> <p>「覚えてない子もいるよね。だから今日、お家に帰ったら、お父さんやお母さんにみんなが生れた時のことや、赤ちゃんだった時のことを、聞いて見てください。聞いてきたら、先生にもそのお話を聞かせてね。」</p>
------------------	--

表 5 指導案－2 9月12日(水) 5歳児(30人)

ねらい ・人間の生命の誕生に興味・関心を持つ。	
内 容 ・絵本『いのちは見えるよ』を見て、生命の誕生やいのちとは何かということを知る。	
具体的展開方法 (環境設定含む)	保育者の配慮
・導入	<p>・子どもが落ち着いて話を聞くことができるように言葉がけをする。</p> <p>(中略)</p> <p>*子どもたちに絵本の表紙を見せる。</p> <p>「何て書いてあるか読める？」</p> <p>*子どもの反応をみて必要に応じて返答をする。</p>
・絵本を読み始める	<p>「今日は、この『いのちは見えるよ』という絵本を見て、いのちっていうのはどんなものなのかなということをもみんなに少しだけ知ってもらいたいと思います。」</p> <p>(中略)</p>
・読み終えた後の話	<p>・絵本を読み終えた後の話しをする。</p> <p>「みんな、いのちってどんなものか少しだけわかったかな？」</p> <p>*子どもの反応を見て必要に応じて返答する。</p> <p>「それじゃあ、みんなのいのちがどんな風にうまれてきたかも少しわかったよね？みんなのおかさんもこの絵本のルミさんみたいにすごく大変な思いをして生んでくれたんだよ。そのことを先生がみんなのお母さんやお父さんに手紙で詳しく聞きます。そして、聞いたことをひとりずつ順番にみんなにお話をしていこうと思うんだけどどうかな？」</p>
・次の活動へつなげる	<p>*子どもの反応を見て必要に応じて返答する。</p> <p>「それじゃあ、今日、先生がそのお手紙を渡すから、みんなもお父さんやお母さんにしっかり書いてねってお願いしてください。」</p>
	<p>家庭との連携</p> <p>子どもが生まれる前や生まれたときのエピソード、子どもが赤ちゃんだったときの話やそれぞれのときの気持ちを渡した紙に書いていただく。</p>

表 6 指導案－3 9月19日～25日 5歳児(30人)

ねらい ・自分の誕生について友達に知ってもらい喜ぶ ・友達の誕生について興味を持つ	
内 容 ・赤ちゃんの時の写真を見せながら、子ども自身に話をしてもらったり、保護者を書いて頂いた誕生についてのアンケートの内容を子どもに伝える(19日～25日まで行う)(手紙)	

保育におけるいのちの教育

具体的展開方法 (環境設定含む)	保育者の配慮
<p>・ 導入</p> <p>・ 主活動に入る</p> <p>・ 次の活動へつなげる [2～4日目同様] [最終日] (25日)</p> <p>・ 明日の活動の予告</p> <p>・ 次の活動につなげる</p>	<p>「この間、先生がみんなに「いのちはみえるよ」という絵本を読んだ後お父さんやお母さんにお話を聞いてきて欲しいってことをお願いしたよね？どんなことを聞いてきて欲しいって言ったか覚えてるかな？」</p> <p>*子どもの反応を見る。</p> <p>「そうだね、みんながお腹の中にいた時のことや、生まれた時のことや、赤ちゃんだった時のことだったよね。」</p> <p>・ 子どもたちにカゴを見せる。</p> <p>「実はね、このカゴの中には、お母さんから頂いた、みんなが赤ちゃんだった時の写真が入っています。今から先生がこのカゴの中から、写真を1枚引きます。そしてみんなに見せるから、誰だか当ててね。写真の子は、前に出てきてもらって、お母さんやお父さんにどんなお話を聞いたか、話してもらいたいと思います。最後に自分の写真を貼ってもらうからね。みんな、分かったかな？」</p> <p>*子どもの反応を見る。</p> <p>「それでは始めるよ。さあ誰の写真が出てくるかな？」</p> <p>・ 子どもたちに期待をもたせて、カゴの中から写真をランダムに引き、見せる。</p> <p>「ジャーン！これ誰だ？」</p> <p>*子どもの反応を見る。</p> <p>「〇〇ちゃんでした。じゃあ〇〇ちゃん、前に出ておいで。」</p> <p>・ どんな話を聞いたか、子どもたちに話してもらう。</p> <p>・ 次の活動につなげる。</p> <p>「それじゃあ〇〇ちゃん、みんなにお話してあげてください。」</p> <p>・ なかなか話しだせない子や詰まってしまう子は必要に応じて助言する。</p> <p>・ 保護者の手紙を読んで、その子のエピソードをみんなに話す。</p> <p>・ 話し終えたら、写真を貼りにいってもらい、次の子どもも同じようにして呼ぶ。 (1日に6人紹介する。)</p> <p>・ 最後の子どもたちが終わったら、全体に感想を聞いてみる。</p> <p>「みんな、お友達のエピソードや先生のお話聞いてどうだったかな？」</p> <p>*子どもの反応を見る。</p> <p>「今日は〇〇ちゃんと(6人)・・・〇〇ちゃんのことをお話したけど、明日はまた6人同じように一人ずつ紹介していくから楽しみにしておいてね。」</p> <p>・ 子どもが落ち着いて話を聞くことができるように言葉がけをする。 (中略)</p> <p>「今日までみんなが生まれてきた時のことをたくさんお話したけどどうだったかな？」</p> <p>*子どもの反応を見て、必要に応じて返答をする。</p> <p>「みんなは、赤ちゃんがお腹の中にいるときって、どんな風か見たことあるかな？弟や妹がいるお友達は見たことあると思うけど、見たことないお友達もいるよね？みんな去年まで幼稚園にいたみどり先生覚えてる？実はね、みどり先生には、もうすぐ赤ちゃんが生まれてくるの。だから今は幼稚園お休みしているんだけど、明日ね、幼稚園にみどり先生が赤ちゃんが生まれる前の気持ちとか、いろいろな事をお話ししに来てくれることになりました。もしかしたら、大きくなったお腹触らせてくれたり、赤ちゃんの心臓の音を聞かせてくれたりするかもしれないから、楽しみにしていてね。」</p> <p>☆写真を貼る台紙はB紙でつくり、子どもが貼るとき、目安となるように写真の形で貼る枠を書いておく。</p> <p>9/12→アンケートを渡す(14日までに提出してもらう)</p> <p>・ 次の活動につなげる</p> <p>9/14～9/18→下準備をする。</p> <p>9/19～9/25→一日6人ずつ発表する。</p>
<p>家庭との連携</p> <p>・ 子どもがお腹の中にいた時の様子について、子どもに話してあげる機会をつくっていただく。</p>	

表 7 指導案－4 9月26日(水) 5歳児(30人)

ねらい ・人間の生命の誕生の過程に興味を持ち、命の大切さを知る。	
内 容 ・実際に妊婦さんに来てもらい、話を聞いたりお腹に触れたりして命を感じる。	
具体的展開方法 (環境設定含む)	保育者の配慮
<ul style="list-style-type: none"> ・導入 ・これまでの活動を振り返る ・妊婦さんに部屋へ入ってもらう。 ・妊婦さんの話 (内容) 赤ちゃんはお腹の中で眠っているだけでなく動いている。 ・へその緒を通してお母さんから栄養をもらっている。 ・赤ちゃんが生まれる前の気持ち。 ・お腹の中にも、お母さんや周りの人が話している声や音が聞こえているなど。 ・実体験をする為の導入。 ・実体験する。 	<p>(中略)</p> <p>「みんな『いのちは見えるよ』っていう絵本を読んだり、みんなが産まれたときのお話を一人ずつしていったりしたよね？みんなが生まれる前お母さんのお腹ってどんな風だった？」</p> <p>※ 子どもの反応を見て、必要に応じて返答をする。</p> <p>「お母さんのお腹も、絵本に出て来たルミさんのお腹もすごく大きかったよね？お腹の中に赤ちゃんがいたからだよね。今日はこのお部屋に昨日お話ししたお客さんが来てくれています。そして、みんなにお腹の中にいる赤ちゃんのことについてたくさんお話をしてくれます。」</p> <p>・みどり先生を部屋に呼ぶ前に子どもたちに約束事を伝える。</p> <p>「みどり先生のお話は静かに聞こうね。騒いだり、突然大きな声を出したりすると、お腹の中にいる赤ちゃんがびっくりしちゃうかもしれないからね。あと、お話が終わったあと、お腹を触らせてくれると思うんだけど、そのときは強く押したり、たたいたりせずにやさしく触ってください。」</p> <p>・子どもたちが約束を理解できたかどうか確認する。</p> <p>「みんな、先生が言ったお約束きちんと守れるかな？」</p> <p>・子どもたちが落ち着いたらみどり先生に入ってもらおう。</p> <p>「はい、それでは、みどり先生にお部屋に入ってきててもらいたいと思います。みんなでみどり先生のお名前を読んで、拍手をして迎えましょう。」</p> <p>・落ち着きのない子やおしゃべりをしている子には、さっきどんな約束をしたか思いだし、静かに話を聞くことができるように言葉かけをする。</p> <p>「先生とのお約束もう忘れちゃったのかな？覚えているなら直そうね。」</p> <p>・子どもたちが集中して話を聞くことができるように配慮する。</p> <p>・話を聞き終えた後、質問をする時間をつくり、子どもたちが積極的にみどり先生と関わることができるように配慮する。</p> <p>「みんな、みどり先生からお腹の赤ちゃんについてお話をたくさん聞かせてもらったけど、何かもっと知りたいことがあったら手を挙げて聞いてみてね。」</p> <p>・手を挙げている子を一人ずつ順番に当てて、質問できるようにする。</p> <p>・実体験(お腹に触れる、聴診器で心臓の音を聞く)を通して、より身近に命が感じられるような時間をつくる。</p> <p>「赤ちゃんは、今みどり先生のお腹の中でみんなと同じように元気に生きています。みんなちよつと心臓に手を当ててみて下さい。どう？動いてるよね？」</p> <p>※ 子どもの反応に対し、必要に応じて返答する。</p> <p>「心臓が動いているってということは生きているってことだよ！じゃあ、音は聞こえるかな？」</p> <p>※ 子どもの反応に対し、必要に応じて返答する。</p> <p>「心臓の音って、小さいけれどちゃんと音がするんだよ。みんなと同じようにお腹の中にいる赤ちゃんも心臓の音はするんだよ。今日はこの『聴診器』という心臓の音がよく聞こえる機械を使って赤ちゃんやみんなの心臓の音を聞いたりしてみたいと思います。」</p> <p>・2人ずつペアを作り、順番に妊婦さんの所へ行ってお腹に触れたり、音を聞いたりできるようにする。</p> <p>・全員が体験できたら、感じたこと、思ったことが言えるようにする。「みんなみどり先生のお腹触ってみてどうだった？きちんと動いていたよね？お腹の中で元気に生きている証拠だよ。それじゃあ、赤ちゃんの心臓ってどんな音が聞こえたかな？トクトクトクって、元気だよ、元気だよって言うてみたいだったよね。みんなの心臓の音はどうだったかな？」</p> <p>※ 子どもの反応に対し、必要に応じて返答する。</p> <p>「ドクンドクンって、赤ちゃんよりゆっくりで大きな音だったよね？」「みんなも心臓の音から『いのち』を感じる事ができたと思います。」</p>

保育におけるいのちの教育

<ul style="list-style-type: none"> ・妊婦さんにお礼を言い別れる ・全体のねらいに結びつける話をする。(まとめ) ・次の活動へつなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お話をして頂いたみどり先生にお礼の言葉を全員で言う。 「それでは、今日みんなのためにたくさんのお話をしてくれたみどり先生に心を込めてお礼を言いましょう。さんはい・・・」 ・最後にもう一度子どもにいのちの大切さを伝える。 「みどり先生、お腹にいる赤ちゃんのこととっても大切そうにしていたよね？それと同じように、みんなもお母さんに愛されて大切にされて生まれてきたんだよ。もちろんお父さんもみんなが生まれて来るのを“まだかな、まだかな”ってずっと待ち望んでいたんだよ。そして、お父さんお母さんだけでなく、周りの色々な人からたくさん愛情をもらいながらみんなここまで大きくなったんだよ。」 「みんなの『いのち』っていくつあるかな？」 *子どもの反応に対して、必要に応じて返答する。 「『いのち』は一つしかありません。そのたった一つしかないいのちとはとてもとてもかけがえのないもので、大切なものなんだということを分かってくれたと思います。だからみんなはお父さんお母さんからもらった、たった一つしかない自分のいのちを大切にしてくださいね。」
--	--

家庭との連携

みんながどれだけ家族や周りの人から愛されているかということを伝え、いのちの大切さを教えていただくようにする。



実践例A テーマ「みんなのいのち」
(絵話1～7は抜粋)



1 (春)



2



3



4 (巣立ち)



5 (秋)



6



7 (冬)



実践例B テーマ
「一つの命はみんなの命」
(仕掛け紙芝居1～5は抜粋)



2



3



4



5



実践例C テーマ「つながっている」
(エブロンシアター)

2. プログラムへの振り返り

第14回でプログラムによる何らかの変化や気づき、印象に残ったプログラムについて記述してもらった。

何らかの変化や気づきの内容は、死のイメージの転換と、悲しい、辛い、別離以外の意味があることへの気づきを記述したものが7名と多かった。自分の命が多くの人によってあること、そのいのちを大切にしたい、感謝したいと述べているものが5名で、中には「自分の命は地球全体とつながっている」と表現した者もいた。授業に参加してから、子どもの話している言葉に敏感になったり、生や死について考えるようになったものが5名いた。この中には、友人を失ったあと、考えないようにしていた学生、母親の死を受け入れられないでいた学生も含まれている。子どもの死生観が、周囲の大人とのやり取りの中で育まれるということを自分自身の幼少期の体験の振り返りや実習での幼児の言葉を通して実感したことを記述した学生が2名いた。そのうちの1名は

「今の自分の死生観は、周りの人とのかかわりの中で築き上げられたのだらうなとは感じます。そういう風に思えるよう死や生から遠ざけず受け止めさせてくれた親、特に母には感謝の気持ちでいっぱいです」と述べている。また、死生観を育む機会をつくることが保育者の大切な仕事と述べた学生が1名いた。

印象に残ったプログラムは第5回のVTRが最も多く8名からの回答があった。VTRによって、子どもの持つ力、感性、希望について考えさせられた学生が多かった。第2回目の自分自身の誕生にまつわるエピソードの発表を上げたものは6名で、両親をはじめ様々な人に支えられて、今ここにあることを追体験した学生が多かった。しかし中には子どものころの記憶がはっきりせずこのような試みが辛いものであった学生もいた。絵本作家、近藤薫美子先生の講演を上げたものは4名で、命は他の命を食べることによって支えられていること、無駄な死はないことなどに気づいたと記述している。近藤先生の講演により、動植物が

他の動植物の栄養になるなら「人間の死は、生きていく人の糧になる」と記述した学生もいた。DVDの登場人物の肉親を愛しむ気持ちに感動したものが2名いた。グループワークをあげたものも2名で、他の人の本音を聞くことができた述べ、友人同士でも死に関する話はタブーであることが推測された。絵本に感動し、子どもたちの反応を見たいと記述した学生や、専攻科学生の発表に刺激を受けたと述べた学生は1名ずついた。

IV. 考察

1. 課題テーマの選択

テーマの一覧をみて最初に気づくのは直接「死」を扱ったものをあげていないということである。これはこの時期の教育が知識を詰め込むものではなく、シントラーの主張に基づき、「死生観を養うための蓄えとなるもの」という今回の試みの主旨を学生が理解していることを表すと考える。動物は命があって動き、植物にもまた生命があることや、動植物の生命が他の生き物の生命を育んでいること、命が伝えられてきたものであるということを感じて理解させることを幼児期の教育として必要であると考えられている。

次に気づくのは、子どもたち一人ひとりが愛されて生まれてきたのだというメッセージを子どもに伝えたいとするグループがあることである。それは今回のプログラム第2回の反映であると考えられる。青年期の学生にとって社会における自立は発達における課題として重要であるが、その基礎となるものは保護者のゆるぎない愛情を通して獲得した人間への基本的な信頼感である。学生はプログラムにおいて自分たちの出生をめぐるエピソードを知ることにより自分自身が望まれて生まれ、愛されて育ったことを再確認し、それをさらに子どもたちに伝えることの重要性に気づいたのではないだろうか。

また、4グループ（個人）のように、いのちの形に違いはあってもかけがえのないものであるということを子どもたちに伝えようとしている学生もいる。デーケンも子どもに対する「死への準備教育」は、あらゆる機会をとらえてするべきだと述べ、「いじめ」の問題も自分の生命だけでなく、他者の生命も大切にしようという観点に立てばか

なり防げるのではと述べている¹¹⁾。そういった意味でこのテーマも幼児へのいのちの教育としてふさわしいものであろう。

2. 指導案の一例を通して

どの学生も熱心に取り組んだが、早期に指導案の作成に着手し、かつ楽しみながら教材を作っていたグループの指導案（表3～7）を取り上げ、プログラムとの関連から考察する。

テーマは「いのちの誕生」であり、絵話や絵本、子どもたちが赤ちゃんだったころの写真を教材とし、最後に妊婦を招く構成になっている。ねらいは表3のように2点採用している。

まず、ねらいの第一点、「全ての生き物に尊い命があることを知る」というねらいである。非常に大きなねらいで、極端に言えば大人の集団を対象としていても不可能である。我々は人間というフィルターを通してしか物が考えられず、動植物の命は「尊い」と言いつつ、実際は優劣をつけている（赤痢菌や蚊を殺しても誰も騒がない）。しかし、枝葉末節にとらわれることなくこのような大きなねらいをたてることも学生らしいととることもできる。2000年に改正された保育所保育指針において、5歳児の保育のねらいのなかに「身近な社会や自然の環境と触れ合うなかで、自分たちの生活との関係に気づき、それらを取り入れて遊ぶ」「身近な社会や自然事象への関心が高まり、様々なものの面白さ、不思議さ、美しさなどに感動する」などがあげられている。兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会による「幼児・児童の死生観についての発達段階に関する意識調査」では、5歳児は男女とも動く動物は生きているという認識がある一方で、自動車も生きていると思う子どもが約35%、タンポポは生きていないという回答も30～40%見られる¹²⁾。したがって、知識として「～を知る」というねらいをたてるよりも、保育所保育指針のように「命（いのち）の持つ不思議さに感動する」などの表現のほうがよいのかもしれない。これらの研究結果についてはプログラム第4回で解説しているが、課題導入時にも、対象年齢における一般的な死生観の発達について復習することを助言すべきだったと思われる。

ねらいの第 2 点は表 3 の通りである。保育所保育指針の 6 歳児の保育のねらいには 5 歳児のねらいが少し複雑化した形で「身近な社会や自然事象への関心を深め、美しさ、やさしさ、尊さなどに対する感覚を豊かにする」とある。幼稚園教育指導要領の人間関係、環境のねらいや内容にも身近な人への愛情、信頼感、生命の尊さなどのキーとなる言葉が含まれている。学生のたてたねらいはこれらも包含しており、よいねらいと言える。しかし、やはり知識を身につけることよりも教育活動を通して感じることを重視して「一人ひとりが家族や周囲の人から愛情を受けながら育ってきたことに気づく」あるいは「～育ってきたことに喜びを感じる」「～育ってきたことの喜びを自由に表現する」などでもよいかもしれない。

週案を見ると 4 週全てが月案におけるねらいにきちんと呼応している。まず「生命」という概念を理解する蓄えとするために動植物の命について絵話という親しみやすい教材を使って導入している。2 週目以後の試みの準備として家族との連携も考えられている。2 週目は絵本『いのちは見えるよ』を教材にしている(絵本の出典は巻末参照)。この絵本は初めて子どもを生み育てる目の不自由な夫婦の奮闘を隣に住む少女の視点から描いている。学生自身、主人公が視覚に障がいを持つ人であるということにとらわれず、むしろ絵本の中の「いのち」を子どもたちに伝えようとしたようである。第 3 週のねらいは自分自身の誕生について友だちと共有して喜ぶことをねらいとしている。家族から話して貰うだけではなく、クラスで共有することにより子どもたちは自分だけではなく他の子どもも一人ひとりが家族の愛情のなかで生まれ育っていることを感じとっていくのではないだろうか。そして 3 週目までに自分の出生についてかなり想像を膨らませていた子どもたちは、実際に妊婦の話や胎内における赤ちゃんの心音を聞いたりすることにより、「大切にされているいのち」「優しく生まれているいのち」「いのちの不思議さ」などを体を通して感じる。必ずしも自分自身が同じように母親のおなかのなかで大切にされて育ったのだという理解には結びつかないかもしれないが、不思議さを感じ、それが死生観を育てる蓄えとなればよいのではないかと。学生が、作った

指導案ではあるが、構成としてはすぐれたものであると言えるだろう。

次に表 4 の日案であるが、ねらいが「～を知る」となっており、学生が多くのことを子どもに知ってほしいと意気込んでいることがわかる。絵話の展開を見ても問いかけが「この絵のなかにもたくさんいのちがあるんだけどみんなわかるかな?」「リスもチューリップもちょうちょも鳥もみんな生きていていのちがあるんだよ」と知識を確認したり説明的になっている。まとめの部分でも「みんなにもいのちってあるよね」などの表現がある。「いのち」があることをストレートに教えなくても、卵を一生懸命温める親鳥や鳥の糞に含まれる植物の種が芽を出して成長するシーンなどを通して子どもの心に「何かあたたかく生き生きとしたもの」が蓄えられるのではないだろうか。そういう意味で膨大な知識を与えようとするよりも、「糞の中に種があってそれが芽を出すこと」にびっくりしたり感動したりすることを大切にしたいほうがよいだろう。

この指導案の中で注目したい点はもう一点ある。16 行目、「この巣の下、ちょっとだけのぞいてみようか!」と言って「☆巣をペロッと一瞬めくる」と書いてある。上述したように学生は、いのちという難しいことについて教えようと少し力んでいるが、それでも保育者として子どもを喜ばせることを忘れていない。一瞬見せて、もっと見たいという気持ちにさせようとしている。そして学生自身も子どもとともに楽しむ設定になっている。難しいテーマに挑戦しているからこそ、このような面白さ、ユーモアが大切である。デーケンもユーモア教育を勧めているが、シントラーもユーモアによって子どもの緊張と苦悩を解きほぐすことができると述べている¹³⁾¹⁴⁾。いのちの教育をするためには根底に常にあたたかいものが流れていなければならない。そして活動の終わりの常にあたたかい気持ちになれるように配慮する必要がある。それが子どもたちの死生観の発達を支えるものとなっていく。

表 5 の日案についてもねらいは「～関心を持つ」ということであるが、具体的な内容を見ると知識を与えようとしている部分が目立つ。保育者自身が「いのちってどんなものかということをもみんな

に知ってもらいたい」「いのちってどんなものか少しだけわかったかな」「みんなのいのちがどんな風に生まれてきたか～」と「いのち」という言葉を繰り返し使っている。たとえば「今日は『いのちは見えるよ』という絵本を読みます。『いのちは見えるよ』面白い題名だね？どんな本なんだろうね。」などと一緒に考えていこうという姿勢を見せるだけでよいのではないだろうか。絵本は知識を与えるために使用するのではなく子どもたちの心を豊かにするために使うのである。それは生と死の教育、いのちを伝えるための教育においても同じである。絵を楽しむストーリーを楽しむ、子ども心に豊かなものを蓄えるのが絵本のねらいである。したがって、読み聞かせの後にいのちが見えたかどうか、わかったかどうかを確認するのではなく、先に子どもの反応を見たり「ルミさんってすごいね！先生びっくりしちゃった」などといってもよいのではないと思う。鈴木は「Death Education は、教師と子どもたちが一緒になって、人間の、そして個人の〈生き方〉を考える時間である」と述べ、さらに「価値観に関する教育は、両者が問題を共有することで、始めてその端緒にたどりつくことができるのではないだろうか」と述べている¹⁵⁾。「いのち」の解釈に正解はなく、まして幼児が定義のように記憶するものではない。保育者はいつも子どもとともにスタートラインに立っているつもりで普段の保育の中で、意図的でありつつも、幼児自身に何か特別なことをしていると、ことさら意識させずにそれが行えれば理想的である。

同様に表6の日案も、この活動を通して子どもが楽しめること、幸福感を味わうことが大切である。赤ちゃんだった頃の写真を見て、かわいいと感じたり、現在の友だちと見比べて楽しんだりすることはとてもよい体験であろう。そして、あらかじめ用意してある台紙（手作りされたきれいなものがよいだろう）に写真を貼っていく作業を通して大事にされていると感じたり、自分の成長を実感することもできる。このような取り組みは家族との連携が不可欠であるが、家庭の事情によっては協力できない場合もあり、事前の十分な計画や配慮が必要になるだろう。

さらに表6のように子どもの出生にまつわるエ

ピソードを子ども自身に語らせるのは難しい。家族とよく相談して保育者が代わりに語ったり、家族参加の会にするなどの工夫が必要だろう。また、写真は家族にとっては大事なもののなので、プロジェクターで見せるなど使用する際の注意も必要である。

表7の日案は妊婦を招く計画になっていて学生としては実現不可能かもしれないが、実際に小学校での取り組み事例がある¹⁶⁾。金森は1989年にいのちの学びの実践として妊婦を小学校の教室に招いた。金森学級の子どもたちは「重くないか」「寝るときどうするか」「赤ちゃんがどうやって息をしているのか」など様々な疑問を投げかけ、そして命を体に宿すことがとても大変なことだと実感する。おなかに触り、「体に気をつけてね」と妊婦へのいたわりを見せ、自然におなかの子どもに「早く出ておいで」と声をかける。妊婦自身も大勢の子どもがおなかの子の誕生を待ち望んでいることにとても励まされたという。幼児の場合はどうだろうか。妊婦の存在感だけでもなにか圧倒されるものがあるだろう。そして、この日の体験が「いつの日か」自分自身も家族に望まれて生まれたこと、自分の誕生が家族に幸福をもたらしたことへの実感につながればよいのではないだろうか。ただ、幼児の場合、疑問をストレートにぶつけてくる。たとえば、「赤ちゃんはどこから生まれるの？」などの疑問を口にする子どももいるだろう。そんな時、どうわかりやすく答えるかもあらかじめ考えておく必要があるだろう。

本研究の考察の主旨とは離れるが、この指導案はわずかな実習経験しかない学生が考えたものであるため、難解な言葉が使われていたり、実施には無理があったりする点が多く含まれている。たとえば、表7のように聴診器で胎児心音を聞く試みがあるが、聴診器での胎児心音聴取は難しく、まして幼児では不可能である。日野原の試みを参考に聴診器を教材として使おうとする学生が多いが、感染の問題への配慮が必要であるうえ、取り扱いが難しい¹⁷⁾。イアーピースは子ども用にできておらず、また、使用中に採音部がどこかに当たるとかなり強い音が耳に響く。聴診器の取扱いは小学校の中・高学年でないと難しい。このように通常の指導案と考えればそのほかに指摘しなけ

ればならない点は多くあると思われるがここでは割愛する。

以上のことから保育者養成校における生と死の授業を行う上でこのような指導案を作ることは「生と死について何も意識しない保育者」「どうしてよいかわからない保育者」「死をタブー視する保育者」から脱却し、「幼児とともに生と死を学ぶ保育者」となるために有効な方法であると言える。しかし、一つの指導案を振り返っただけでも、学生は何か通常の保育とかけ離れた難しいことを教えなければならないというスタンスに立ってしまいがちであることがわかった。これは、今後同様の取り組みをしようとしている現場の保育者も陥りやすいことではないだろうか。本プログラム第6回では『死を見据えたいのちの教育—絵本というひとつの教材—』というテーマでスライドを使って講義をしている。そこでは、いのちの教育で大切なことは文字を教え込むようにするのではなく、食事習慣や清潔習慣の確立などへの支援と同様に生きる力をはぐくむものとして実施すること、子どもの年齢だけでなく、発達や理解度に合わせること、子どもを取り巻く環境・エピソードを大切にすること、保護者と協力することなどを説明しているが、学生は十分理解できなかったようである。次回から指導案が子どもへの知識の詰め込みにならないよう、子ども自身が楽しんだり感動したりする中でいのちの大切さを心の中に蓄えていけるよう、注意深く助言していくべきであろう。

3. プログラムの効果

プログラムはまだ終了していないが、第15回目までを学生の振り返りの記述を中心に評価したい。

まず、今回までの3回の試みによって、開始時の死生観の記述や、それを基にしてのグループワーク、VTR、学生にも絵本が有効であることはおおそ明らかになっているが、今回も自分自身の死のイメージの変化を述べたものが多かった。また、結果に述べたように、今回のプログラムによって自分自身のいのちが多くの人とのつながりによるものであることや、両親の慈しみの中で支えられてきたこと、他の動植物の死によって自分

自身のいのちがあることなど多くのことに気付くことができたようである。印象に残ったプログラムとして、第2回の試みやVTR、近藤薫美子先生の講演をあげた学生が多かったが、記述内容には、自分のいのちが多くの人との命のつながりによっていることへの気付きが述べられていて、第7回の『いのちのまつり』の読み聞かせからもかなり強いインパクトを受けているように感じられる。プログラム中に絵本の読み聞かせを入れることが効果的であることが再確認できた。このように自分自身のいのちが多くの人とつながっていることや支えられている感覚を持つことにより、自己肯定感を育んだり、両親ばかりでなく亡くなった人、周囲の人、動植物にも感謝の気持ちを持つことができるのではないだろうか。今回の振り返りではいのちの大切さや感謝の気持ちを表明した学生が多く、プログラムが複合的に影響したと考えている。

第2回の誕生にまつわるエピソードの発表に関しては、結果に述べたように、幼少期の記憶がはっきりしない学生もいるため、今後は一方的に取り組みの説明をするのではなく、質問や相談が個別に受けられるよう説明をしておく必要があらう。

次に、プログラムに参加し実際に幼児に対する死生観を育むための指導案を作る過程を通して、保育の場における取り組みの重要性や、それらが保育者の役割であると明確に記述する学生がいたことは、今回のプログラムの成果であろう。方法のところでも述べたように、シントラーは子どもたちの死生観は『心の蓄え—支え』として、どのような対話を大人としてきたか、またどのようなやりかたで—たとえば絵本を読む、お話を聞く—蓄えができていたかに大きく依存している」と述べている。プログラムを通して、学生自身の死生観が周囲の人たちとの関わりの中で構築されたことに改めて気づくことによって、自分もまた保育者として関わる子どもの死生観に影響する存在であることが認識できたと言える。

プログラムはさらに継続し、指導案の幼稚園での実践や、死別体験者の講演、宗教学者を招いての講義を予定している。学生に知識を詰め込むことがないように自戒しなければならないのはもちろ

んであるが、このような試みをきっかけに、さらに学生自身の死生観を育んでほしいと願っている。

V. おわりに

今回の試みを通して、特に重要と思われたことは2つの点である。第1に、保育者は子どもの死生観の発達を学び、それに合わせて意図的に計画し育んでいく必要があること。第2点は、意図的ではありつつも、子どもには「生と死」を知識として詰め込むのではなく、日々の保育の中で楽しんだり、感動したり、保育者とともに悲しんだりする中で子どもの死生観を育むことが大切であるということである。これらのことは、現場に立ってから学ぶのではなく、将来的には保育者養成校で何らかの形で教育内容に組み込まれていくことが望まれる。

文献

- 1) 愛知県ホーム 頁、『命を大切に作る心を育む教育推進事業』2007年6月9日閲覧日2007年9月26日
(<http://www.pref.aichi.jp/0000001960.html>)
2007年9月26日閲覧
- 2) 愛知県ホーム 頁『命の大切さをはぐくむ保育』公開講座 2007年8月21日
(<http://www.pref.aichi.jp/0000003651.html>)
2007年9月26日閲覧
- 3) 尾上明子・中根淳子「生と死を考える試み 保育者養成において」『名古屋柳城短期大学紀要』第26号、2004年。
- 4) 尾上明子・中根淳子「生と死を考える試みー保育者養成において その2ー」『名古屋柳城短期大学紀要』第27号、2005年。
- 5) 尾上明子・中根淳子「保育者養成における生と死の授業」『名古屋柳城短期大学紀要』第28号、2006年。
- 6) 茂純子他「レギーネシントラーの『希望へとはぐくむ』～要約と解説～」2004年、43頁
- 7) ダナ・カストロ著 金塚貞文訳 『あなたは、子どもに「死」を教えられますか?』 作品社、2002年
- 8) 兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会 『幼児・児童の死生観についての発達段階に関する調査』 兵庫生と死を考える会、2003年、4頁。
- 9) 前掲6、47頁。
- 10) 同上
- 11) アルフォンス・デーケン『生と死の教育』岩波出版、121頁、2001年。
- 12) 前掲8、7-8頁。
- 13) 前掲11、49-56頁。
- 14) 前掲6、54頁。
- 15) 鈴木康明『生と死から学ぶ デス・スタディーズ入門』北大路書房、120頁、1999年。
- 16) 金森俊郎『命の教科書』角川文庫、2007年、74-80頁。
- 17) 日野原重明『十歳のきみへ』富山房インターナショナル、2006年、175頁。
- 18) 前掲6、47頁。

文中の絵本

- 1) マックス・ベルジュイス『かえるくんととり のうた』清水奈緒子訳、セーラー出版、1991年
- 2) ハンス・ウィルヘルム『ずーっと ずっと だいすきだよ』久山太市訳、評論社、1988年
- 3) まどみちお作、ましま せつこ絵『ママだいすき』こぐま社、2002年
- 4) ディック・ブルーナ『ミッフィーのおばあちゃん』角野栄子訳、講談社、1997年
- 5) 草場一壽作、平安座資尚 絵『いのちのまつり』サンマーク出版、2004年
- 6) スーザン・パーレイ『わすれられないおくりもの』小川 仁央訳 評論社、1986年
- 7) 及川和男作、長野 ヒデ子絵『いのちは見えるよ』岩崎書店、2002年

プログラム中に使用した DVD・VTR

- 1) DVD マイケル・デュドク・ドゥ・ヴィット 監督『岸辺のふたり』東芝 EMI、2003年
- 2) VTR NHKスペシャル「こども・輝け命」第4集「小さな勇士たち～小児病棟 ふれあい日記～」2004年 NHK 放映

“Education of Life and Death” in Childcare

— Lesson Plans by Students —

Nakane, Junko*

Onoe, Akiko*

The author of this paper carried out a series of sessions which targets the students who are to be educators of young children and will have to convey the importance of life to their class.

This paper discusses the results of the first 15 over 23 sessions. This year, in addition to enriching the program of developing the students' view of life and death, we carried out the planning and practice of coaching children. As a result, the students became more aware of the importance of approach in educational site and the educators' role with children establishing the view of life and death. However, they generally attempt to teach life and death as knowledge. Since the education of life should be conveyed in daily childcare such as in communication with adults or reading picture books, we need to develop the program with more emphasis on this point.

キーワード：保育者 (educators of young children), 指導案 (lesson plan), いのちの教育 (education of life and death)